

グッドラック・ママ

音韻俳句

グッドラック・ママ

ぼくのママの名前はイオカステ、とても知的で魅力的な声の持ち主なんだ。君もきっとぼくのママが気に入るはずさ。

だけど残念ながら君にぼくのママの顔を見せることはできないんだ。何故かというとな、ぼくのママは別の世界に住んでいるんだ。うん、そうだよ、人格ROM、ママは電子の海の中で生きているんだ。あの世界にもたくさんの方がいるからママもきっと寂しくないと思っているんだ。

ぼくは特別なパスワードを持っているからママとは“親子の会話”ができるんだ。ママはいつも優しい声で学校のこと（ぼくは小学校4年生なんだ）や、友達のこと、そして、おばさん家での生活（ぼくはここで暮らしている）のことを訊いてくるんだ。そしてぼくはいつも言うんだ「うん、とっても楽しいよ」。ママは「そう、うれしいわ」って言うんだ。ママはぼくが楽しい毎日を送っていることがとってもうれしいんだ。そしてぼくもママがうれしいことがうれしいんだ。ぼくはママが大好きなんだ。

「シーク、朝食片付けますよ。早く降りていらっしやい」

伯母の呼びかけから大分遅れてシークはテーブルについた。冷めたスープとパンが一人前残っていた。向かいの席では伯父がコーヒーを飲みながらTVニュースを観ていた。

台所から声がする。「早く食べなさい。学校に遅れるわよ」

階段を駆け下りてきた従兄弟のマイクが言った。

「なんだよ。今からメシか。どうせ学校に行きたくないんだろう。ママ、行きたくない奴を行かせたってしょうがないぜ」

「わたしはイオカステから、この子の為に毎月きちんと養育費を貰っているんですからね。そんなことはできませんよ。・・・どうしたの、ほら、早く食べなさい」伯母は顔をしかめて言った

。

シークはパンを一切れ嚙って、しばらくの間噛んでいた。

「学校に行きたくない・・・」シークはポツリと言った。

「こいつ、いじめられているんだよ」とマイク。

「まあ、どうして」

「母親がいないからさ」

「何言っているの。イオカステは・・・そりゃ、もう肉体はないけれど（どうせ、あの娘の体は生まれた時から不自由だったし、今の方がよっぽど・・・）、ちゃんと生きていますよ。いつだってお話できるじゃない」

「それだけじゃないさ、他にも・・・」

「やめてよ」シークは口を挟んだ。

「・・・こいつの母親が快樂ネットで働いて・・・」

「なんてこと言うの」伯母は顔を真赤にして叫んだ。「そんなこと外では噂になっているのかい。もうそんなこと決して口にしないよ。これ以上広まったら恥ずかしくて外に出られないよ。父さんだって困るんだよ。ねえ・・・」

「え、・・・ああ・・・」伯父はニュースを観ているふりをして言った。時計をちらりと見て立ち上がり、何も言わずに玄関の方に向かっていった。

「あら、あなたもう会社に行くの」伯母が玄関へと小走りに追っていった。マイクも何食わぬ顔で玄関に向かう。

シークはゆっくりとパンを嚙っていた。

(ぼくのママ、ぼくの知らないママがいるんだろうか。でもぼくには特別のパスワードがあるんだし、そこにはぼく以外の誰も入ることはできないんだ・・・)

その日の午後、まだ日が沈む前にシークはこっそりと家に帰ってきた。結局、学校の前までは行ったが、自分と母親の名を呼ぶ声がどこからともなく聞こえた途端、やり切れない気分になって、公園をぶらついてきたのだった。公園では小さな子供が母親と一緒に笑いながら歩いている光景を三度見ることになった。

彼だけのママではない、別のママが学校にはいる。また伯母の家の中にも別のママがいる。彼は自分のママが分裂を繰り返し色々な人々の処へ散っていくのを感じ、めまいがした。

――でも、ぼくだけのパスワードがあるんだ。ぼくだけのママが。伯母さんはぼくが何食わぬ顔で学校へ行くことで、全てのママをぼくが取り返して、何も無かったことにしたいんだ。だけどママは、初めからぼくだけのものだったはずだ。伯母さんはママの姉さんなのにママのことを愛していなかった。それはママが体が不自由なのに、みんなに愛されたからだ。そしてまた今、ママが(ぼくの知らないママが)、みんなに愛されている。それが嫌で、ぼくに何とかして欲しいと思っているんだ。伯母はきっと怒るだろう。ぼくが学校に行かないことで、噂がますます広がるからだ。シークは思った。

シークは音をたてないように(見つかるのを恐れたのではなく、誰かに気づかれるのは非常に疲れることだったので)、廊下を歩いていると、伯父と伯母の話し声がリビングから漏れ聞こえた。

「・・・じゃないか」

「よくありませんよ。だからわたしは反対したんですよ。それなのにイオカステは昔から人の言うことを聞く娘じゃなかったわ。・・・シークを産むときだって、わたしは反対したのよ。あんな体で、どこの馬の骨とも知れない男の子供なんか作って。そしてやっぱり、出産のせいで体を悪化させたと思ったら、どこから見つけてきたんだか、いかがわしい記憶バンクのパンフレットを持ってきて、ここに入るからシークをよろしくお願いします、養育費は送るからって勝手に決めてしまうし。・・・もう死んだような人間から、お金が送られてくるなんて信じられなかったけど」

「でも、あの子を引き取ると決めたのはお前だぞ」

「いくらなんでも、生まれた子供が可哀想だったからよ。養育費だって当てにしてなかったわ。あの子があそこに入る頭金だってわたしが工面したんですから」

「俺の会社の金だ」

「確かに今では莫大なお金がイオカステの名前で振り込まれてくるわ。どうも変だと思ったら」

「俺は・・・別に構わないと思うが。お金はちゃんと貰っているんだし」

「でも、噂になっているじゃないの」

「じゃあ、どうしろと言うんだい。別に悪いことをしているわけじゃ・・・」

「悪いわよ。売春と同じでしょ。・・・あの娘には向いているかもね。体が不自由な分、人一倍、欲望が激しかったわ。誰にでも媚を売って、好かれて・・・」

「今の時代、こんなことは珍しくないよ。難しく考えなければいいんじゃないかな」

「でも、シークのこともあるし」

「あの子はまだ子供だから母親が何をやっているかなんて理解していないさ。みんなにからかわれるのが嫌なだけさ」

「そんなこと言っても、最近の子供は・・・」

「大人がしっかりしていれば大丈夫さ」

シークは自分の部屋に入り、明かりをつけると、まっすぐに机の上にあるコンピューターのキーボードに向かった。パスワードを打つ。

「ママ」

「なあに、学校はもう終わったの、シーク」

「うん」

「どう、学校では楽しくしている？伯父さん、伯母さんはどう？マイクとは仲良くしている？」

「うん」

「そう。何かあったら何でも相談してね。わたしはここから出られないから、シークの方になってあげられることなんて少ないかも知れないけど・・・。ごめんなさいねシーク。わたしのせいで嫌な目に会うこともあるかも知れないわね。他の子みたいにママと手をつないで歩くこともできないから・・・」

「そんなことないよ」とシーク。「ママは世界一の、ぼくだけのママさ」

「シークはいい子ね。・・・勉強でわからないところあった？見せてごらんささい」

「うん。これ」

「ねえ、ママ」

「何？」

「ママはぼくがいない間、何してるの？」

「それは難しい質問ね。・・・ここはね、そっちとは時間の流れ方が違うんだけど。でも、実時間は常にこっちにわかるようにはなっているから。眠っているようなものかしら。シークはまだ小さいから説明しにくいわね」

「ぼくと話していないときは寝ているの？」

「もちろん、他にもしなくちゃいけないことはいっぱいあるし・・・ママだって・・・ここではね、いろいろなことが同時にだって出来るのよ。わかる？だからこうしている間も他のことができるの」

「ママは今、他のことしているの？」

「シークとお話するときは他のことはしないわ」さすがママだ。

「じゃあ、起きているママと寝ているママがいるんだね」

「まあ、そんなものかしら」

「ママはぼく以外の人ともお話しているんだね」

「シークがママ以外の人とお話するように、ママだって他の人ともお話するわよ。・・・でもシークとのお話は特別ですからね。なんていっても、ママとシークは親子でしょ」

「うん」

今晚はとても冷え込む。シークはとうとう耐えられなくなって、トイレに行こうと身を起こした。ちらりと時計を見ると二時ちょっと過ぎだった。もぞもぞと眠い目をこすり、ふらつきながら部屋を出て、階段を目指した。少し歩いたところで、マイクの部屋に明かりが灯っているのに気がついた。かすかにうめくような声がしているような気もした。半分意識朦朧としたまま前に進むうちに、マイクの部屋の扉にぶつかった。明かりの中に投げ出されて、シークは目が覚めた。しかし、そこもまるで夢の中の様にゆらめく世界だった。

マイクは机の前に体を丸めるような姿勢で向かっていた。机に取り付けられたコンピュータの端末から出ているらしきコードが、こめかみあたりに繋がっている。彼は体をわずかに揺らして、うめき声を上げていた。彼の回りはピンクや黄や赤の織り成す完備な色彩に彩られているような気がしたが、それはシークが寝ぼけまなこだったせいかも知れなかった。

突然、場面が変わったかのような感覚と共に、マイクが小さな叫び声を上げた。シークはふらふらとマイクのもとに近づいた。マイクはうつろな目でシークを見た。

「・・・シークか」マイクはつぶやくように言った。「ちょっと待ってくれ」

マイクはコードをこめかみから外し、軽く頭を振ると、シークを見てニヤリと笑った。そして一枚の小さなカードを取り出して、シークの目の前に突き出してみせた。

「これが何かわかるかい」マイクはうつろな表情をくずしてクックツと笑うと、「親父の部屋の中にあったのさ」マイクは少しヒステリックになっているようだった。

シークは妙に冷めてきた。空気がいやに肌に染みる感じがする。それと同時に、何か異常な光景が自分の目の前で起こっているような気がした。そして、それは自分に関係してくる事であろうという確信が頭の中を駆け巡った。

「親父の奴、こんなもの隠していたんだぜ」マイクの声が上ずる。「俺も使ってみたけど、最高だな、こりゃ」

「何なの、それ」シークは自分が沈黙していることが、急に怖くなってきた。何か言わなくてはと、搾り出すようにして言葉を発した。

「お前の・・・、お前のママだよ。イオカステ叔母さん」

「ぼくのママ・・・」

「あのな、このカードを使って、パスワードを・・・とやってみな。いつもの叔母さんじゃない・・・だけど叔母さん本人なんだ・・・に会えるぜ」マイクは気も狂わんばかりだった。泣いているのかも知れなかった。

マイクは沈黙した。

しばらく経った後、マイクは持っていたカードをシークに投げつけた。

シークはそれを反射的に受け取った。そしてそれをしばらく眺めてから、マイクに言った。

「それじゃ、おやすみなさい」

返事は無かった。

シークは急いでトイレを済ませると、一目散に自分の部屋に向かった。

ぼくのママ。

シークは部屋に入るとすぐにカードをセットしてパスワードを打ち込んだ。ママは怒るだろ

うか。ぼくは行ってはいけないところへ行くのだろうか。そんな思いがシークの脳裏を横切った。だけどシークは自分の知らない母親が存在することが許せなかった。こめかみにプラグを当てはめる。少しくラっとして目の前が真っ暗になった。

深い海の中で漂っているような感覚と共に、シークはうっすらと目を開いた。暗く淡い色彩が自分を取り囲んでいる。自分の肉体は見えない。しかし、そこに体があるという感覚は確かにある。彼女がゆらゆらと揺れながら裸でやってくる。それがはっきりと目に映っているのか、感覚によるイメージなのかもはっきりしない。しかし、長い茶色の髪をなびかせながらやってくる姿は、とても怪しげだった。微笑んでいる。瞳が何色にも光り輝いて見えた。イオカステは手をシークの方へ伸ばして頬を優しくさすった。

(ママ・・・)

シークはイオカステに自分が分かるかと思ったが、そんな様子はない。彼女はやわらかい虹色の指先をくねらせながら、シークを抱きしめた。胸の奥でピリッとした、むずがゆい感触が生まれ、体全体に広がってゆく。

(ママ・・・)

シークはイオカステに抱きついた。顔を彼女の胸に激しくすりつける。手でそこら中を触ってみる。ママだ。ぼくのママだ。他の子どもたちが母親に甘えるように、ぼくは今、ママに抱きついている。これをぼくは待っていたんだ。ずっとこのまま、こうしていたい。

突然、耳もとに甘い囁き声が聞こえた。体がビクッと痙攣する。「ああ・・・」彼女はシークの耳たぶを噛んだ。首筋を舐め回す。唇に吸い付いた。激しくしゃぶりつく。彼女の唾液の渦の中にシークは飲み込まれていくようだった。

(ママ・・・ママ・・・)

彼女の手がシークの下腹部をまさぐる。シークの陰部に触れた。やさしくさすってみる。軽く握って、しごいてみる。シークは体中の力が抜けたようで、母親との二人きりの甘美な世界が永遠であるかのような気がしてきた。

気がつくのと、陰部に妙な感覚が走って、膨らんできた。ドクッ、ドクッと脈をうっている。イオカステはそれを愛しそうに撫で回した。強烈な快感がシークの脳天を突き刺した。ハッとすると、シークの足元で、彼女がシークのモノを口に含んでいた。シークはびっくりして、止めさせようと思ったが、声が出ない。次第に我を忘れていくような快感に包まれて、二人はどことも知れぬ宇宙の中を漂っていた。

(ママ・・・)

イオカステはシークの手をとると、彼女の陰部へと導いた。シークがまさぐってみると、そこには毛が密集していた。生ぬるい、ベタベタしたものが、シークの手と毛を絡み付ける。

「奥・・・、もっと奥よ・・・」イオカステの声がシークを誘う。奥は肉が幾層にも重なっているようだった。かき分けて進んでいくと、汁が溢れ出してくる。「いいわ・・・」シークが指を抜くと、イオカステはシークの陰部を握って、自分の陰部へ導く。

「ここへ入れて・・・」

イオカステに手伝われながら、シークは言われたとおりにした。ヌルヌルとした感触を味わいながら突き進む。「動かして・・・」シークはちょっと動かしてみた。すごい。こんな気持は初めてだ。シークの心を快楽が支配した。それはずっと心の奥底にあった真実がとうとう現れたかのような確信的な快楽だった。

シークは無我夢中で運動を繰り返した。イオカステの喘ぎ声も高くなる。「そう・・・も

っと・・・いく・・・いくう・・・」シークの下腹部に何か起きた。それが、いったい何なのか知ることもなく、シークは昇り詰めた。そして、その瞬間初めて、今の事に対する強烈な罪悪感がシークの心を支配した。

シークは目を覚ました。カーテンの隙間から朝日が漏れている。机に向かったまま寝ていたらしい。プラグが転がっている。シークは昨晚のことを思い返してみた。ぼんやりとしている。何か辛い気分にもなる。

カードを取り出して眺めてみる。カードを丸めてみる。プラスチック製のカードは、しばらく抗った後、パリンと音を立てて割れた。ゴミ箱に放り込む。

ぼくには少し早すぎた。シークはそう思った。当分は普段のママにも会いたくないと思った。だけど、別にママを嫌いになったわけじゃない。今でも大好きだよ。だってぼくだけのママだもの。

シークはキーボードに向かうと、伝言モードにして、イオカステ宛のメッセージを打ち出した。

大好きなママへ

僕はママが大好きだけど、
いつも一緒にいると甘えちゃうから、
しばらくの間、一人でがんばってみるね。
学校では楽しくやっているよ。
おばさんたちもやさしいよ。
それじゃあ、またね。
グッドラック・ママ